

グローバル化を考える

グローバル化の進展により外国を身近に感じるようになってきましたが、一方で難しい問題が山積しています。その問題解決の糸口の一つとして、地域レベルでの市民・文化交流があるのではないのでしょうか。一見遠回りのようで、長い目でみれば国と国の親善の基礎になるものと考えられます。地域を担う自治体職員にとっても、こうした交流を深める意義が高まってきています。今回は、長い外交官生活を通じて、地域交流の重要性を肌で感じてこられた田中映男氏にご寄稿いただきました。

森と水の国際交流—地域文化で つなぐ親善

元オーストリア大使 田中 映男



はじめに

文化が違えば、発想法が違います。互いに考え方を交換することはとても面白いことです。ナイジェリアに赴任していたころ、俳句のコンテストで小学校を巡りました。大使として相手国の子供を知りたいし、将来親日的な大人になってもらえたらと思い、始めました。私はどこかの国のように政治向きの話も、宗教の話もしない、日本人が日々の暮らしを詠ってきた伝統的な短詩型を子供に教えたいと思いました。賞品？ポケットマネーで買った日本の色鉛筆です、と説明したらOKが出て小学校を紹介してくれました。全部で18校を訪問しました。子供たちの作品にはアフリカならではの風土を写したものの、日本人とも通じる生活の一場面を表現した秀作もありました。“さあタイヘン、おっかさんの大事な水汲み瓢箪、川べりで落として割っちゃった”なんてユーモアは日本でも通じますね。私自身、文化交流の現場で多くを学びました。文化交



ナイジェリア大使公邸の小学校俳句授賞式レセプション

流の現場にいと、日本と外国の市民が、謡いや民謡、茶の湯や折り紙など日本人であれば普通に出来ることを通して、互いに、やあ愉しかった、発見があったと喜ぶことが分かります。しかもそれが長い目で見ると国と国の親善の基になるのです。

このたび「国際文化研修」に寄稿する機会にあたって、日本から、それも地域からの文化交流発信を提言します。日本の市町村には、まだ宝が眠っていて、もっと、もっと日本各地から海外に行って欲しい、反対に世界から人を受け入れて交流して欲しい、というのが私の実感です。

外交と文化交流

外交官の三大任務は、①相手国政府との交渉、②情報収集・分析と戦略、③自国民保護と言われてきました。文化交流はこのうち①の外国とのより良い関係構築のための外交活動としても大事なものです。しかも地域の文化交流の役割は増しています。②と③にも役立つのですがここでは触れません。

大使が日本の基本政策は「自由貿易と国際協力の推進」であると説明しても、欧米では、「いやいや日本の自動車市場は政府と業界で護られているから日本の輸入は増えない」と報道したり、さらにはもっと極端に、「キミ達日本人の生活習慣がそもそも我々と違うから、外国製品を受け入れないんでしょう」などと冗談めかして聞かれたこともあります。

実際に私が某百貨店の家具売り場の責任者

から聞いたエピソードがあります。かつて90年代に「経済摩擦」が声高に叫ばれた時、その改善策として日米政府合意の中で、米国製消費財の輸入増進キャンペーンが実行されました。「ところが売れないんです。米国大統領がホワイトハウスで使う高級デスクを置いて、百貨店の外商のお得意様を招きましたが誰も買わないんです。それでワシントンから担当の高官が来まして、理由を教えろと言います。そこで、お客様は塗り仕上げを実感したいので、机の天板の上も下も触るんです。そして下はザラザラだ、と驚いてお買いあげになりませんと答えました。その高官は、エッ、日本人は机の下にコップを置くのか、理解出来ないと絶句した」というのです。日本人が暮らしの中でイイものを目だけでなく手で触って、美意識を養ってきた文化は知られていないのです。

ここまできたら普通の暮らしにおける日本人の発想法を理解してもらわないと、いつまでたっても、日本人は集団で日本市場を閉鎖して一方的に得をしている、という国際的な非難には答えられません。地域レベルで直接市民交流をする必要がここにあるのです。

逆方向の例を挙げれば、日本からホームステイに来た女子高校生たちが、ドイツの女子高生は朝お化粧をする習慣がない、そもそもお化粧品を持っていないのに驚いたという発見があります。ドイツ側の発見は、日本のメツェン(女の子)は化粧が速い、という驚きでした。

通商摩擦を減らすために、地域交流で民謡の手踊りを教えたり、子供同士が折り紙で遊ぶのは、遠回りに見えて実はより効果的なのです。根本に立ち返るからです。ドイツ人の好きな戦略論というなら、間接戦略にあたります。直接反論するより実際に目で見て発見してもらう戦略ですね。

それだけではありません。ドイツやオーストリアでは歴史的な経緯により、文化、それに教育政策に中央政府があまり口を挟みません。中央ではなく、バイエルンやチロルといった地方ごとに自分たちの文化政策を決めたい、という地方での主体意識が強靱です。ドイツ

文学をよく読みますとか、オーストリア音楽が好きですよと言うより、ミュンヘンのビールはおいしいですねとか、ウィーンのホイリゲ酒場の流行歌が好きです、と言った方が喜ばれます。彼ら自身が、言葉やメンタリティが同じバイエルン州内で、チロル地方で、明確な差があると意識しています。言語と習慣の差は自身の誇りですからこだわります。そこで文化交流を地域でする方がすんなり受け入れられる例があるようです。

いくつかの実例

私がお手伝いした地域の文化交流で、これからの参考になりうる例を、思い出すまま挙げてみます。

私がフランクフルトの総領事を務めていた時に、ヘッセン州のバードゾーデンという町の町長さん一家と仲良くなりました。バードゾーデンにはドイツ中部有数のタウヌス山系が走っていて、麓の森林では車を止めて湧水を汲む人をよく見かけました。町長に聞くと水が良くて有名と聞く養老町(岐阜県)と姉妹都市の関係になりたい、と希望を述べられました。バードゾーデンはフランクフルト近傍の保養地で、ワグナーやメンデルスゾーンも訪れています。きっと養老町にもプラスになるだろうと考えて、養老町から送られてきた提携のための基本文書のドラフトを翻訳しました。その際、日本語では明記していなくとも、日本人なら当然括弧の中に書いてあると読むはずの、注意点を口頭で説明しました。ドイツ側が明確な規定を求めている場合には、日本語の原文を手直しして日本側に確認を求めました。こうして役割分担を最初からお互いに納得した上で、町長が訪日した際に調印に同席しました。これは両方の自治体の観光開発に貢献したと思います。

同じヘッセン州にドイツのサッカー、ブンデス・リーグで有名なカイザース・ラウテルン市があります。親日的な市長さんで、この市民有志が、日本式の庭園(準日本庭園)を自分たちの手でコツコツ作るのを応援しました。池を掘り花を植え、今度は東屋を建て

て茶室を作りたいというのです。日本政府の補助金は、もう他の国の日本庭園の修復プロジェクトなど用途が決まっています。そこで日本からピアニストと画家に手弁当で来てもらって、演奏会と展覧会を開きました。市民からの募金が集まり、その上愛知県や三重県など日本から展覧会を見に来た日本人が、市内のあちこちで市民有志と出逢ったために、自然発生的に日独交歓の夕べが生まれ現地メディアでも大きく報じられました。こうして、東屋と茶室は完成したのです。

オーストリアでは、チロルのクラムザッハ市を訪れた安曇野市の市民代表団が民謡踊りを見せたら、地元消防団員が、とうとう手拍子に参加して踊りだした例もあります。不思議なことは、最初は手拍子が全くそろわないのに、日本人の拍子を聞いているうちにだんだん興味を覚えて真似をして、最後には上手に民謡の手拍子がとれたことです。

宝塚市からウィーンに少年少女合唱団が来て、予定していた演奏会場が使えないことがありました。宝塚市はウィーン市の中でも第9区と姉妹都市提携をしています。ウィーン市は原則姉妹都市提携はしないことになっていて、23ある区が提携先になるのです。宝塚市からの相談を受け、第9区の区長さんと相談しました。シューベルトの生まれた家があるから、狭いけれどそこで公演したらどうかと勧められ大盛況でした。

ウィーンの森と水

ウィーンの水は塩素処理をしない森の水です。市民が100年以上前から森をきれいに保つ努力をしてきました。カフェで「アイネン・クライネン・ブラウネン、ビッテ」(モカ珈琲一杯)と注文すると、立派な白髪の給仕が銀のトレイの上に、淹れたてのモカ珈琲に硝子コップ一杯の水を添えて持って来ます。水道水は無料で30分ごとにお代わりが来ます。ウィーン料理の味もウィーンの森の水で増すようです。

私は40年前ウィーンに初めて勤務しました。出張を終えた某省次官が、学者肌の博識な方

で、ウィーン文学に出てくる有名な森を散歩したいので案内して欲しいと注文がありました。お話を伺いながら3時間も歩きました。この時にウィーンの森を管理するウィーン市森林局とお近づきになったのです。大使で赴任することになると、森と水で何か交流を始めたいと考えました。

森については、ウィーンの森に倣^{なら}って、森を活かしながら維持する兵庫県の「丹波の森構想」の活動を伺いました。丹波市と篠山市が支援する市民活動です。篠山市はかつて私がお願いして海外で講演していただいた河合隼雄さんの出身地です。日本人の発想をより深い所から説明するのに、ニューヨークのメトロポリタン美術館で日本人の自然観と仏教観について講演していただいた記憶があります。そこで兵庫県丹波の森協会の活動を森林局に話したところ、なんともう何年も代表団を受け入れていて、これからも支援しますとのことでした。

その時に森林局の職員に、ウィーンの水道の水源地について質問しました。すると、ラックス・シュネーベルク山系というかつての皇室所有林から引いている、今でも国有林で開発が禁止されて森林局が管理している。そこに皇帝が建設した大理石の貯水池があって、そこから180キロの道のりを、360メートルの落差を利用して水道管でウィーンまで引いている、見たいかと聞かれました。

皇帝フランツ・ヨーゼフの上下水道整備は都市計画の土台でした。背景に急速に都市化したウィーンの衛生問題があったようです。



ウィーンの森ラックス・シュネーベルク山系にある地下の皇帝の大理石貯水池 (あまりに透明なので写真に水が映らない)

帝国に住む16以上の多民族は潜在的に緊張を抱えていました。もしウィーンの生活が快適であれば、逆に夢の都として帝国をまとめる求心力を期待できるかもしれません。水道は1873年万国博覧会の年に開通しました。ウィーンのアパートの各階段には“バッセナ”と呼ばれる珓瑯^{ほうろう}びき洗面台が水道蛇口付きで取り付けられました（下の写真）。バッセナは庶民の井戸端会議の恰好の場所でした。その当時バッセナでの無駄話をバッセナ・トラツチェ、その無駄話から口論に発展して、遂には訴訟にまでなると、裁判所でバッセナ・プロセスが開かれ、公判の日には傍聴人が詰めかけたと言います。きっと面白いものだったのでしょう。一般市民はカフェハウスに避難して、新聞を読み、手紙を書きトランプに興じ来客と会いました。今でも有名な紳士服老舗を訪問すると、大抵は、シェフ（ウィーンの店員が店主を呼ぶ時の尊称）なら近所のカフェに居ると言われるでしょう。

良質な水の涵養地を保存する市民の努力

日本でも水源地を涵養する市民の活動に出逢ったのです。それは岐阜市の金華山の湧水を水源とする逆川^{さかしまがわ}の達目洞^{だちぼくぼら}の保全です。ヒメコウホネやモリアオガエルを守ろうとする市



ウィーン市内アパートの階段に残る19世紀の皇帝の水道蛇口「バッセナ」

民が自発的に水質保全運動を始め市が支援していたのです。その翌年は日本とオーストリア政府の賢人会議が日本で開かれる年でした。そこで私は岐阜県



達目洞を視察するオーストリア代表团

知事と岐阜市長、さらに岐阜の経済界のリーダーを訪問して、市民交流の趣旨を話して協力をお願いしました。オーストリア側からは、中央銀行や外務省、環境省の知日派、そして環境専門家が参加しました。一行はシンポジウムで市民の活動を知り、長靴を履いて達目洞の湿地帯を歩いて活動に触れたのです。岐阜市民の関心が高まったので、翌年は岐阜市民とその家族にウィーンを訪問してもらい、ウィーンの森や皇帝の大理石の貯水池を見学して、ウィーン市森林局と市民の水質保全活動に触れました。その夕方、大使公邸で市民に直接交流をしてもらいました。大人の合唱の交換も素晴らしいものでした。子供たちの遊びはそれ以上でした。用意した通訳では足りず、子供たちはもう直に日本語とドイツ語と手真似でおはじきと折り紙を始めたのです。おはじきは床に直接座って、折り紙は予想外の形が生まれるのですから子供たちは釘付けです。最後に日本から来た子供たちが童謡を歌って全員が感動して帰りました。

地域の文化交流には大きなポテンシャルがあると痛感しました。

著者略歴

田中 映男（たなか・あきお）

1947年東京都生まれ。71年東京大学経済学部中退、外務省入省。在西独大使館、ブラジル大使館、国連代表部で勤務したのち1999年在フランクフルト総領事発令。2004年から在ナイジェリア大使、2007年から在オーストリア大使、2010年退官。